# 赤松智城の宗教学散策

——未刊原稿と写真資料を中心に——

全　京秀

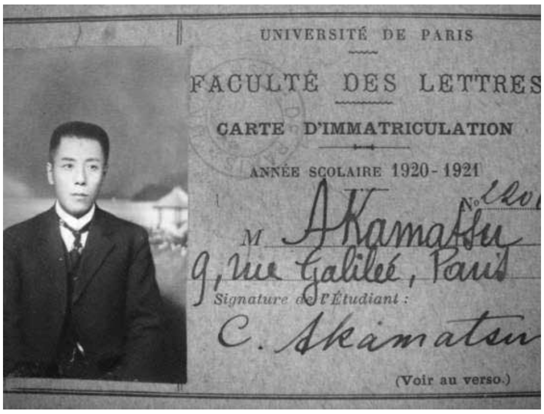
## 1　はじめに

ひとりの学者の業績を分析する方向は二種類の道が可能だと考える。一つは制度史的な側面で、他の一つは研究史的な側面であろう。この二つの側面から赤松智城の業績を照らしてみるならば、いかなる結果が生まれるだろうか?　植民地時代の制度史というと相当政策的な状況を反映すると考えられる。京城帝国大学（以下京城大）という高等教育機関内に宗教学講座というものが設置されたことは制度史の側面だと言うことができ、その延長線上で赤松が講座担当の教授として赴任したことも制度史の側面だ。研究史の側面から赤松の業績を分析した論文が何本かすでに発行されている（全京秀 2005.10.15 & 2008.1.30; 菊地暁 2007.2.; 中生勝美 2016.3.20）。以前の論文は赤松が残した宗教人類学的な業績に焦点を合わせたものであるのに対して、本稿では宗教学講座の教授として京城大に赴任した赤松が宗教学という学問を研究し講義する過程を実践するためにどのような作業をしたかについて集中的に関心を持って彼の業績を整理してみる機会としたい。したがって本稿は制度史の延長線上で赤松を眺めた論考だと言える。

京城帝國大學「法文學部」の建物の前で
退職直前の 1941 年始め（？）の写真と思われる（徳応寺所蔵）

赤松の宗教人類学的な功績は宗教現象を理解するために人類学的な方法を動員したことにある。京城帝国大学で行った宗教学の研修過程でフランスのデュルケーム学派の影響を大きく受けた赤松がフランス社会学派の研究傾向を習得することによって 19 世紀後半の人類学的動向に心酔した結果、フランスに留学をしたことはフランス社会学派からの深い影響を立証するのに充分だ。だからと言って、簡単に赤松を人類学者であると断言はできない。彼はあくまでも宗教学に根差しており、宗教現象の理解のために人類学的方法に心酔して、それを取り入れたことは明らかだ。本稿では宗教学者としての赤松の全体像を把握することに努めようと思う。

赤松が発表した多くの論文は宗教学研究のための方法論に重点を置いていた。その結果として心理学的方法、社会学的方法、人類学的方法などに関する論文が発表された。宗教研究者として赤松は研究論文の発表だけでなく講義と著述を通じてその姿を見せてくれた。本稿では赤松が講義と単行本の著述を通じて自身の宗教学を完成しようと試みた努力の一環を明らかにしてみようと思う。論文とは違って単行本を通して見た赤松の特徴はいわゆる大宗教に対する著述に集中しているということがわかる。本稿で大宗教というのは赤松の観点が反映された仏教をはじめとする、キリスト教とイスラム教そしてユダヤ教を指している。大宗教に関する赤松の著述の大部分は公式の出版物としてではなく未刊の原稿と講義用教材の形で存在していることがわかった。さらに、山口県の周南市（もと徳山市）に所在する徳応寺に保管された赤松の遺品の中で発見された未刊行論文や著作もこの機会に紹介しようと思う。

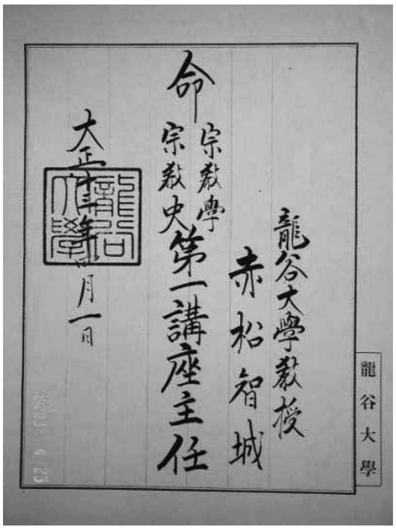



パリ大学身分証明書（徳応寺所蔵）

赤松の「日本帝國海外旅券」。
「教學研究ノ爲メ英吉利國及佛蘭西國巴里へ」と記録されている（徳応寺所蔵）

赤松は徳応寺住職だった赤松照幢の 7 人あった子どもの兄弟姉妹の中で長男であった。彼が龍谷大学に在職時の自筆履歴書（1927 年 2 月 25 日作成）によれば、1907 年 6 月に第五高等学校を卒業してすぐに京城帝国大学文科学部哲学科に入学して宗教学を専攻した。1910 年 7 月に卒業して、9 月に京都帝国大学大学院特選給費学生として選抜された。1920 年 4 月から仏教大学（後に龍谷大学に名称変更）の主任教授になって宗教学と宗教史講座を担当した。そして欧州遊学中の 1924 年 4 月 1 日付で龍谷大学宗教学宗教史第一講座の主任教授になった。

「1921 年 8 月、パリギャラリーにて羽溪君撮影」という
赤松の手書きの記録が写真の背面にある（徳応寺所蔵）。
左から宇野圓空、赤松、羽溪。三人は同じ日付、同一の方法で渡歐した。



龍谷大學

龍谷大學教授
赤松智城
命宗教學
宗教史第一講座主任
大正[illegible]月一日

龍谷大学が発行した赤松の主任教授発令の辞令（徳応寺所蔵）

## ２　仏門から宗教学へ

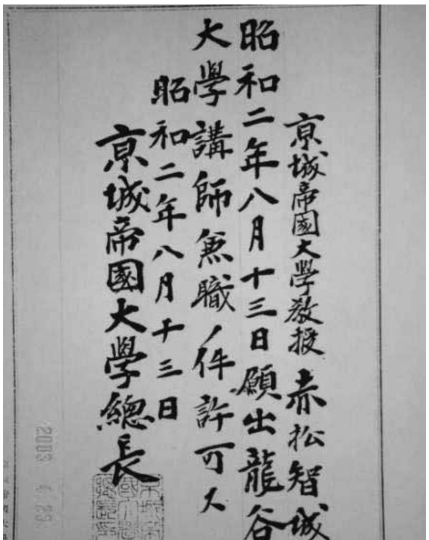
与謝野礼厳（京都本願寺派願成寺）の次男照幢（幼名は龍麿）は、赤松連城の婿養子として徳応寺に入った。そして照幢の弟が与謝野寛（鉄幹）だ。この両名の祖父は明治近代史で有名な与謝野礼厳と赤松連城ということになる。『本願寺新報』1024 號（1944.9.25）によれば 1944 年 9 月 21 日、勤皇僧追慕法要と講演会と法要が開催された。この記録の中に「勤皇僧遺族」とあり、「勤皇僧礼厳の孫でありまた赤松連城氏の孫としてあとを継いでいる赤松智城」と紹介されている。

すなわち照幢が徳応寺の 16 代住職で、17 代住職が智城だ。智城の幼名は智麿（ともまろ）であり、7 人の兄弟姉妹の長男だ。「智城師の活動は甚だ精力的で、徳応寺と、京城の大学と、京都の大学との三ケ所を往返し多忙な中で多くの論文を発表された」（徳応寺 1992.2.29:27）。赤松が大学の仕事で京城と高野山などを忙しく通う間、自坊の法務は住職代理の岩城真也などが引き受けた。智城の弟克麿は、マルクス主義屈指の理論家であり、東京帝大法学部在学中に「新人会」を結成した人物で、1924 年日本労働総同盟政治部長、社会民衆党書記長（1930 年）を引き受けた。弟克麿は、戦時中、日本国家主義活動に転向して大政翼賛会企画局制度部長（1940 年）を勤めたので、戦後公職追放になった。智城の妹常子は 1934 年総同盟婦人部長であったし、戦後社会党に入党して、1947 年参議院議員（18 年間）になり、厚生政務次官も歴任した。智城の弟のひとり五百麿（いほまろ）は 1900 年生まれで、三高と京城大経済学部を卒業して労働運動をしたが、35 才と短命だった。「革新の赤松三兄弟」（徳応寺 1992.2.29:36）と呼ばれたのだが、実際の活動はこの表現が面目を失うほど目覚ましいものだった。次の三人は筆者とのインタビューで大切な事実を語られた。赤松の嫁である蕙夫人は第 18 代尚爾の妻として 1953 年に徳応寺に嫁いだ。徳応寺の 19 代住職泰城師は 1955 年生まれであり、彼の夫人で坊守の湘子は 1954 年生まれだ。蕙夫人による舅・赤松智城の山口大学教授職に関連する証言はとても興味深い。「（智城が）講義に出て行ったことを見たことがないのに給料は支給されていた」という。京城から徳山に戻った後、彼は自身の蔵書を山口大学図書館に寄贈し、それが今日「赤松文庫」として残ることになった。

高野山大学は 1926 年 4 月 2 日単科大学に昇格した。学科は密教、一般仏教、哲学及び科学、仏教芸術の 4 学科構成だった。一般教科に赤松智城、木村泰賢、松本文三郎博士などが新講座を担当した（高野山大学百年史編纂室 1986.10.15:173）。高野山大学は一般教科を構成するために、京都大学の松本文三郎、龍谷大学の赤松智城、東京大学の高楠順次郎博士など当時一流の教授に交渉を始めた（高野山大学百年史編纂室 1986.10.15:175）。結局赤松智城博士が宗教学、木村泰賢博士がインド哲学、松本文三郎博士が仏教芸術学などを担当した（高野山大学百年史編纂室 1986.10.15:177）。1928 年度夏学期に赤松が宗教学概論を受け持った（高野山大学百年史編纂室 1986.10.15:256）。「赤松智城教授（京城大学兼任教授）」（高野山大学百年史編纂室 1986.10.15:259）。京城帝国大学（1926 昭和元年 5 月開学）の総長が発行した文書によれば、「京城帝国大学教授赤松智城、昭和二年八月十

三日願出龍谷大学講師兼職ノ件許可ス」と摘記された。すなわち赤松は 1927 年 8 月にはすでに京城に到着したが、それと同時に龍谷大学と高野山大学に講師の身分で兼職していたということがわかる。そして高野山大学の記録でわかるように、赤松は当時日本宗教学界で独歩的な学問的地位を認められていたと考えられる。

中央に着席した人が智城の父赤松照幢である。後列右に智城（徳応寺所蔵）



京城帝國大學教授 赤松智城
昭和二年八月十三日願出龍谷
大學講師兼職ノ件許可ス
昭和二年八月十三日
京城帝國大學總長

京城帝国大学総長が発行した赤松智城の兼職許可（徳応寺所蔵）

1941 年の始め赤松が京城帝大を辞職直前の歓送会での記念撮影。
前列左から秋葉隆、赤松、柳洪烈（研究室の助手だった）、未詳。
後列右は島本彦次郎（前愛知大學教授）（秋葉万里子所蔵）

赤松は生涯僧侶の職分を守るために、京城大教授職を辞任して徳応寺の住職に復帰した。戦後新設された山口大学に自身の蔵書を全部寄贈して（現在の山口大学図書館 2 階に「赤松文庫」の名前で保管されている）、しばらくの間教授職を引き受けたものの、一度も山口大学で実際に講義をしたことがなかった。日本社会学会会員名簿によれば、1953 年 3 月現在赤松智城は「山口大学　徳山市下御弓丁」と表示されている。すなわち彼は 1953 年までは山口大学教授職にあったということがわかる。

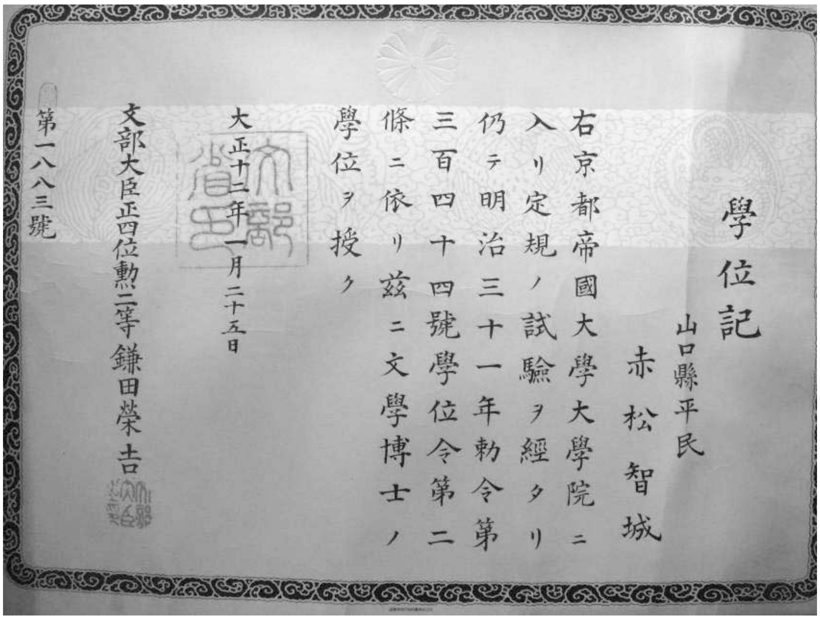
すなわち彼は 1941 年 3 月京城大の教授職を辞任することによって学問の道は終焉したのである。彼が最初に宗教に関する論文を発表したのが 1911 年である点を勘案すれば、赤松の学問人生は約 30 年間持続したと言える。彼が宗教学者として発表した最初の論文の内容が「宗教祈願論」（赤松智城 1911.7.1）だったのは示唆するところが大きい。仏教に根ざしてはいるけれど、赤松の関心が普遍的な宗教と宗教学にあったことを証言できる内容だ。その後に引き続き発表した論文が「呪文と祈祷」であった（赤松智城 1912）。これは宗教学の立場から日本仏教を分析した試みである。日本仏教のひとつの宗派である真言密教の特色が呪文（spell）と祈祷（prayer）にあることを勘案するならば、彼の関心は基本的に日本仏教に関する宗教学的研究から出発したと言える。仏教の家に生まれて、生涯仏教僧としての僧籍を持ち続け、晩年には本格的に寺刹の住職の仕事を遂行した赤松の

**赤松が山口大学図書館に寄贈した図書で構成された**
**「赤松文庫」。山口大学図書館 2 階に所在する。**

学問は仏教学でなく宗教学であったことを確認しておきたい。すなわち普遍的な宗教学の視野から眺めた日本仏教が彼の宗教学的関心の対象であったし、関心の究極的な目標が「宗教の本質としての神聖観念」に置かれていたことと、このような関心をまとめたものが彼の京城帝大学位論文に帰着したということがわかる。

彼の博士学位論文は原稿用紙（縦 22 字、横 13 行） 239 枚の本文と附録として付け加えた原稿用紙 112 枚の「宗教と魔術（magic）」で構成されている。論文の目次は次のとおりだ。「序論: 研究方法、本論　第一章 : 宗教の本質としての神聖観念、第二章 : 原始神聖観念の発生的根源、第三章 : 原始的神秘観念の個体化、第四章 : 原始的神秘観念の規範化、第五章 : 原始的神聖観念の機能的特質」で、付録の論文は 1916 年夏に作成した（赤松智城 1920.5.:111）と摘記されている。

1911 年から 1920 年間に出版された彼の論文（付録として添付された赤松の業績目録参照）は、その大部分が学位論文に部分的に寄与していることが学位論文の内容によくあらわれている。この過程で赤松に最も大きい影響を及ぼした業績はエミール=デュルケームをはじめとするフランス社会学派の諸研究であることは否めない。しかし、赤松の論文にあらわれた論理展開の基盤となる理論等がフランス社会学派の作業にだけ依存していたならば、赤松が残した業績の特色や独創性を取り上げて論じる必要はない。彼が注目したのは魂という次元で動物と人間の関係に関する変換論理であった。宗教と信仰を眺めるこのような観点は日本文化に根差したアニミズム的でアニマティックな世界観に連結されるものだと考えると、赤松がこの部分に対して関心を示したのがフランス社会学派の業績らと区分される論点だ。フランス社会学派の理論を背景として参照しつつ、日本文化に適


學位記

山口縣平民
赤松智城

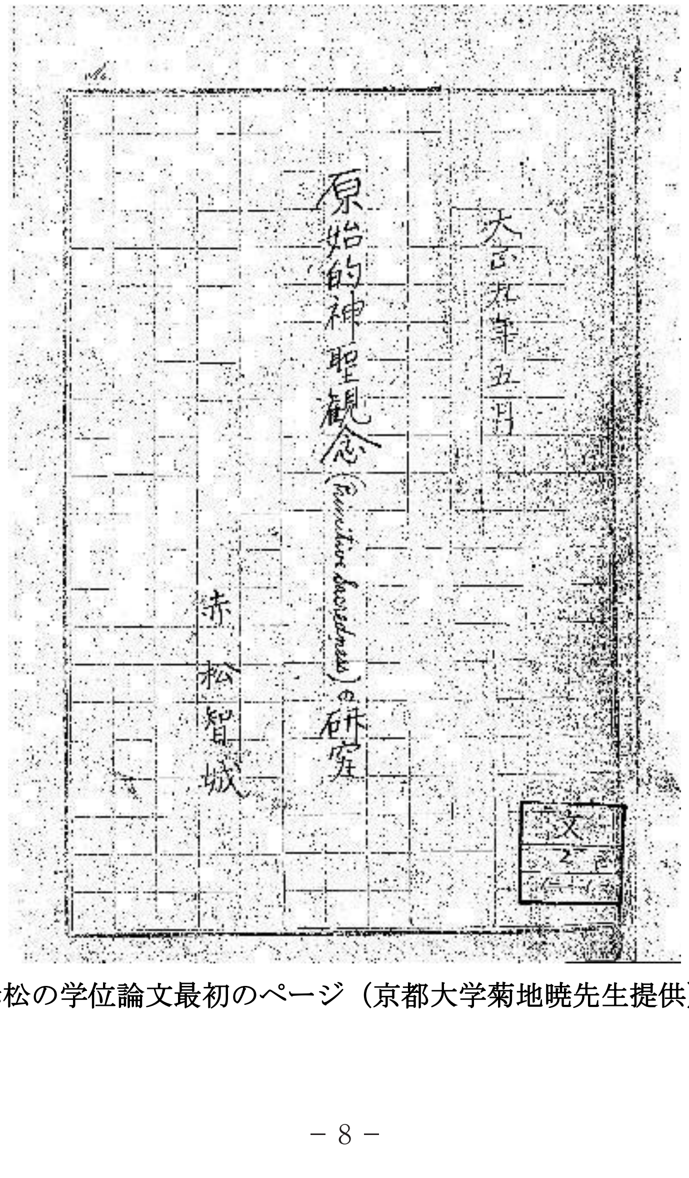
右京都帝國大學大學院ニ入リ定規ノ試驗ヲ經タリ仍テ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ玆ニ文學博士ノ學位ヲ授ク

大正十二年一月二十五日

文部大臣正四位勲二等鎌田榮吉

第一八八三號

赤松の文学博士学位記（徳応寺所蔵）


大正九年五月

原始的神聖観念の研究

赤松智城

文

赤松の学位論文最初のページ（京都大学菊地暁先生提供）

応した自身の論理を展開するために赤松は D. Draghicesco, 1914 の業績 "Essai sur l'interprétation sociologique des phénomènes conscients"、*Revue Philosophique de la France et de l'Etranger* 128: 225-250、& 305-344.を引用している。D. Draghicesco の論文を引用して動物と人間の魂に関する問題を展開した作業は赤松が唯一だと考えれば、この論文が構造的象徴変換の論理でフランス社会学派を構造主義に昇華させたクロードレヴィ=ストロース（Claude Levi-Strauss）の業績でも引用されなかった点に注目しようと思う。この問題は今後掘り下げた議論が必要な部分だと考える。

したがって赤松の宗教学的な関心の展開過程を理解するためには彼の学位論文と共に次の三つの著書を精読することが要求される。『岩波哲学辞典（増訂版）』（岩波書店編 1925.2.1）は宮本和吉・高橋穣・上野直昭・小熊虎之助の編になり宗教学の部分の著述者は赤松智城・波多野精一・石橋智信・宇野円空の 4 名が担当した。この中で赤松は「宗教の起源」（p. 447）を執筆したし、宗教の起源を「歴史的起源」と「心理的起源」に大別して、赤松は後者に関心を持った。この問題は Edward Tylor の人類学の核心だ。それで赤松が「人類学的宗教学」という方法を提起したと見ることができる。さらに赤松は「宗教史」（p. 452）、「宗教哲学」（p. 454）の項目を執筆した、赤松は「神学や宗教史及び宗教学は宗教哲学の材料であって、宗教哲学は此等を哲学的に批判するものである」と指摘した。彼は「タブー」（p. 630）の項目を執筆して、Frazer、Toy、Durkheim を引用しながら、「我国の『いみ（忌）』又は禁忌といふに相当し、本来宗教的意義を有するものである」と述べた。次に「マナ」（pp. 871-872）項目を執筆して、「タブーと併せて原始宗教の特質を明らかにする爲めに多くの学者に依て強調されるやうになつた」（p. 871）。「原始人の心理に於てマナは彼等の宗教及び呪術の共通の根源と見做され、又彼等に特有な『神秘的感応』の心理を働かす機能とも認められて居る」（p. 872）と記録した。赤松はイスラム教と関連した「マホメツド」（p. 873）と「マホメツド教」（p. 873）を執筆した。

2 番目の書籍は 1929 年に発刊された『輓近宗教学説の研究』だ。この書籍は『宗教研究叢書』の第 1 巻として発刊されたもので宗教学会において読むことが積極的に推奨された本だ。日本宗教学会が発行した『宗教研究』の編集を担当した古野清人の名前で編集後記において推奨されている。当時この書籍は宗教学を勉強する学生たちの教科書として広く使われるほどに日本宗教学界で認められていたことがわかる。

3 番目の書籍は『宗教史方法論』（現代史学大系第五巻）だ。赤松は、宗教史の方法を模索するにあたって「民族誌的類同（ethnographical analogue）」（赤松智城 1932.12.:103）を提案し、「文化史的方法」（Kulturhistorische Methode）は新しい民族学的方法の適用であり、『民族学的・歴史的方法』の特徴を骨子とし、その具体的方法は実証的（positive）、比較的（comparative）、歴史的（historical）である（赤松智城 1932.12.:105-106）と指摘した。この著作に対応する 200 字原稿用紙 453 枚の原稿が徳応寺に残っている。

日本宗教学の発展のための赤松の寄与は日本宗教学会の創立過程に注いだ彼の情熱にもよく現れている。彼が京城側の代表者として東京側の代表者らと学会創立に関する議論

をしたことからも宗教学という学問に向かった赤松の執念が理解できるし、このような学問的情熱の延長線上で彼がヨーロッパに留学したことは理解できる。仏教研究から宗教学に向かった関心の拡大が、ヨーロッパ留学の間に達成されたことを彼の学問旅行はよく示している。フランス滞留の間に彼はマルセル＝モースをはじめとするフランス社会学派の業績を深く研究する機会を持った。また、ドイツに移転して彼は集中的にイスラム教に関する授業を受けた。彼が植民地朝鮮と満蒙でシャーマニズムに関して集中的な研究を行ったことは原始宗教の文脈でシャーマニズムを把握して、「巫波論（巫俗伝播論）」（全京秀 2005.10.15 & 2008.1.30）を提示したことは、シベリアの代表的な原始宗教とそれの伝播として満蒙と朝鮮のシャーマニズムを把握したためだ。赤松の巫俗伝播論に含まれた内容の真偽とは関係なく、シベリアを淵源とするシャーマニズムを想定することはすでにニオラーツェ（Nioratse）によっても提示されたことがあることを摘記する必要がある。この問題は今後もシャーマニズム研究において揺るぎない理論の一つとして受け入れられなければならないと考える。筆者はすでにこの部分に対して別途の論文を発表したことがあるので本稿ではこれ以上シャーマニズムに対する赤松の見解には言及しないこととする。

［参考文献］


赤松智城 1924.2. 「回敎徒の復興精神」、龍谷大學論叢 254: 45-57.

1924.3/4. 「回敎思想の特色」、哲學研究 9（3）、9（4）.

1926.1.1a 「回敎と人種問題」、中外日報 7892 號. pp. 1-3.

1926.1.1b 「近東に於ける回敎民族の動亂に就いて（上）」、宗敎研究（新） 3（1）：45-58.

1926.5.1 「近東に於ける回敎民族の動亂に就いて（下）」、宗敎研究（新） 3（3）：124-133.

1928. 「回敎思想」、世界思潮（岩波講座）. 東京: 岩波書店. pp. 381-393.

1929.3.13 輓近宗敎學説の研究. 東京: 同文社.

1930.11.25 「現代回敎の危機」、現代宗敎批判（宗敎研究臨時特輯號）、宗敎研究會編輯部編.東京: 同文館. pp. 268-280.

1932.12. 宗敎史方法論（現代史學大系第五卷）. 東京: 共立社.

1941.7. 「滿洲の回敎に就いて」、宗敎研究季刊 3 年（2）：34-45.

1942.7.20 「回敎の近代思想」、姉崎博士古稀記念論文集（季刊宗敎研究第四年第二.三輯）.東京: 日本宗敎學會. pp. 1-12.

高野山大学百年史編纂室 1986.10.15 高野山大学百年史.

全京秀 2005.10.15 「赤松智城の学問世界に関する一考察: 京城帝国大学時代を中心に」、韓國-朝鮮の文化と社会 4:156-192.

2008.1.30 「『宗教人類学』と『宗教民族学』の成立過程: 赤松智城の学史的意義についての比較検討」、季刊日本思想史 72: 107-129.

菊地曉 2007. 2. 「赤松智城論ノオト——徳応寺所蔵資料を中心に」、人文学報 94: 1-35.

徳応寺 1992.2.29 寺史. 徳山: 徳応寺.

中生勝美 2016.3.20 近代日本の人類学史. 東京: 風響社.

岩波書店編 1925.2.1 岩波哲學辭典（增訂版）. 東京: 岩波書店.

本願寺新報 1024 號（1944.9.25）

民族學研究新 1（11）：65）、1943. 11.

## 附錄: 赤松智城業績目錄

（この目録に含まれた論文のほとんどは博士学位論文に含まれている）

1911. 7. 1. 「宗教起源論の主要問題」、藝文 2（7）：78-89.

1912. 「呪文と祈禱」、密教講演 2: 14-22

1913.7.1 「聲字實相觀の比較」、密宗學報 1: 1-10.

1913.8.1 「宗教と哲學」、密宗學報 3:

1913.9.1 「宗教學の分化及分派」、無盡燈 210: 1-8.

1913.10.1 「宗教學の分化及分派（承前）」、無盡燈 211: 55-62.

1913.10.1 「宗教と哲學（承前）」、密宗學報 4: 18-29.

1914.6.1 「宗教的思辨の變遷」、密宗學報 12: 24-38.

1914.11.15 「社會學と現代宗教學との交涉」、日本社會學院年報 2（1.2）：26-50.

1915.1. 「歷史派の宗教學觀念」、無盡燈 20（1）：49-63.

1916.4. 「最近の宗教心理學と宗教社會學」、宗教研究 1（1）：1-42.

1916.6. 「宗教と魔術」、無盡燈 21（6）：32-41.

1916.7. 「宗教に於ける個人化的傾向の起源」、宗教研究 1（2）：417-421.

1916.8. 「宗教と魔術（二）」、無盡燈 21（8）：17-28.

1916.9. 「宗教と魔術（三）」、無盡燈 21（9）：42-53.

1916.10. 「宗教と魔術（四）」、無盡燈 21（10）：35-47.

1917.3. 「宗教的規範意識」、哲學研究 12: 44-64.

1917.9. 「神聖觀念論」、宗教研究 2（6）：1-24. フランスの宗教社会学者と英国の宗教人類学者の Durkheim, Hubert, Mauss, Lévy-Bruhl, Frazer, R. Smith に言及。

1917. 10. 「神聖觀念論」、宗教研究 2（7）：83-114.

1918.8. 「神聖觀念論」、宗教研究 2（8）：99-152.

1918.11.1 「最近宗教心理學の傾向」、密宗學報 65: 1-18.

1918.12.1 「最近宗教心理學の傾向」、密宗學報 66: 1-21.

1919.1.1 「『タブー』論: 穗積及榊博士の論文を讀みて」、哲學研究 4（1）：70-112.

1919.2.1 「最近宗教心理學の傾向」、密宗學報 68: 8-29.

1919.3.1 「最近宗教心理學の傾向」、密宗學報 69: 5-25.

1919.4.1 「最近宗教心理學の傾向」、密宗學報 70: 22-38.

1919.5.1 「最近宗教心理學の傾向」、密宗學報 71: 17-33.

1919.7.8 現代哲學に於ける科學と宗教. 東京: 博文館.

（日本語訳：李　文相、安渓遊地）

所属：貴州大学

E-mail アドレス：korancks@hotmail.com